SAGA Design Crossing

古くから焼き物や家具といった伝統工芸がさかんで、常にデザインと共に歩んできた佐賀県では、ものづくりの現場にとどまらず、県政にも「さがデザイン」という思想と仕組みを取り入れている。それは単にデザインを使った「見た目をよくする仕事」ではなく、地域や事業などが抱える課題の本質を的確に捉え、具体的な解決策の提案などを行うことで、佐賀県をもっと心地よくし、施策を磨き上げる視点である。

1月27日(土)、第一線で活躍する多彩なクリエイターを迎え、デザインの視点から見た佐賀の未来について、さまざまな角度からアプローチするシンポジウム「SAGA Design Crossing」が開催された。

デザインの視点で佐賀県を見つめ直し、未来をひらく

基調講演 地域×デザインの可能性

デザインは必ず地域を強くする

「そもそもデザインとは何か?」と問われると、「生活をより良くする考え方」だと答えます。時代とともに社会の価値観は大きく変化してきました。デザインの定義も変化し、「美しいものをつくる」だけがデザインというわけではなく、思想や概念を組み立てて設計することや問題を解決することを意味し、それをさまざまな媒体で表現をすることがデザインです。私はデザインには可能性しかないと思っています。そしてデザインはこれからの地域を必ず強くします。今では地域デザインに投資をすれば、まちづくりや地域創生、産業や観光などで経済効果が生まれるようになりました。

日本ではクリエイティブを「新たなものを創り出す」と解釈していますが、これから必要なのは「分野をこえてつながる共創」です。既存のアクションも、人や場所をつなぎなおすだけで見え方が違ってきます。一番大事なポイントは、皆さん一人ひとりが自分のくらしや佐賀のまちを見て、「生活をより良くする」ためにどのような問いを見つけ、そこにどうアクションを起こすかだと思います。

デザイン投資は継続がキーワード

外部から見た佐賀県のすごさは、デザインをまちづくりに生かしていることです。デザインを核としたコミュニティを創り、政策と現場がシンクロしながら動いています。佐賀県庁は、庁内だけで決めるのではなく、外部の目線を取り入れています。2017年のグッドデザイン賞で「さがデザイン」の取組がベスト100を受賞したときには、佐賀ではこんな先進的なこともやっているのかと驚きました。

ただ、デザインに投資したからといって変化はすぐには起きないため、途中で打ち切るケースも少なくありません。その経済効果を数値で測りにくいことも原因の一つです。デザインの効果測定において重要なのは、金銭的価値ではない効果を可視化することだと思います。デザイン投資による効果は、まちの幸福度で示されるものであり、最近ではその数値化について研究も行われています。良いデザインが溢れていると、まちの幸福度は上がるのです。

「さがデザイン」は今年で9年目を迎えるそうですが、苦労もあったでしょう。ですが、デザインの力を信じ、継続して進んできたこと、常に課題を考察し、持続的に社会生活をよりよくする活動を行ってきたことが成果に結びついています。このようにデザインは、継続することで、地域を持続的により良くし、強くし続けます。

デザインはシンキングからアクションへ

1957年に始まったグッドデザイン賞。現在、審査委員長をやっていますが、近年は行政からのエントリーも増えてきました。佐賀県も「さがデザインの取組(2017年)」「さがアグリヒーローズ(2022年)」「空港リノベーション(2023年)」がグッドデザイン賞を受賞しています。行政の取組は評価されにくいので、こういった認証があれば第三者への説明もしやすくなります。なにより、(受賞は)自分たちがやってきたことの自信にもつながります。

デザインとは、誰もが様々な形で参加できる活動です。使う、修理する、共有する、保存するなど、なんでもデザインです。訓練を受けないといけないものではありません。デザインはこれからの地域を必ず強くしていきます。デザインシンキングとよく言われますが、シンキングの時代ではなくてアクションを起こさなきゃいけません。ぜひ皆さんも一緒に、アクションを起こしていきましょう。

齋藤 精一 氏
パノラマティクス主宰
建築デザインをコロンビア大学建築学科(MSAAD)で学び、2000年からニューヨークで活動を開始。2006年株式会社ライゾマティクス(現:株式会社アブストラクトエンジン)を設立。2025年大阪・関西万博EXPO共創プログラムディレクター。

クロストーク

基調講演に続き、齋藤精一氏とともに、3名の登壇者を迎え、デザインの視点から見た佐賀の未来についてさまざまな視点で語った。

●「さがデザイン」を始めた経緯と想い

山口 自分がまだ20代で総務省にいたころ、仕事で出会ったデザイナーに「生活の暮らしを良くするのがデザイン」、「未来を切り拓くようなもの」と言われたのがずっと心に残っていました。政策やまちづくりに、デザインの力を活かせればと考えを深めてきましたが、自分がリーダーとなった大好きな佐賀で実現したいと、満を持して「さがデザイン」を立ち上げました。

縦割りを無くしコンセプトを明確にして磨き上げることで、価値のあるものができるし、よい政策が生まれると思います。例えば、県庁周辺のお堀で囲まれたエリアを「佐賀城公園」といいますが、以前は公園の担当部署が管理しやすいように、低木や花壇で囲い段差を作っていて、そこに人が入れない状況でした。ここに、「さがデザイン」の視点で、人が交流する場というコンセプトとし、一体的にイベント等にも活用できる心地よい開かれた空間に生まれ変わりました。

ハードだけでなくコトのデザインにも取り組んでいます。例えば「さがアグリヒーローズ」事業では、6次産業化に取り組む農家の経営をデザインするサポートを行いました。参加した全ての農家が、事業目標に掲げた売上1千万円増を3年で達成しました。

齋藤 今は知事が「さがデザイン」を牽引されていますが、そのうちこの思想が当たり前になって、同じ哲学を持つ人が増えることで、「さがデザイン」が県内に染みていくような、要所要所に存在していくことが理想的ですね。

●デザイン視点を取り入れて整備したSAGAアリーナ

山口 最初に方針としたのは、国スポはあくまで通過点だから、国スポだけのために整備するのではなく、その先を大事にしてほしいということです。そこで、いわゆる「体育館」ではなく、"スポーツホスピタリティ"という考え方を取り入れて世界基準の新たなスポーツの楽しみ方を佐賀県で実現する「新時代のエンタメアリーナ」として整備しました。スポーツやコンサートを観るだけでなく食事や商談ができるようにしたり、選手やアーティストにここで演じたいと思ってもらえるような設計にしました。さらに、表側だけでなくバックヤードにもこだわり、設営等で働くスタッフの方々が作業しやすいように裏方に至るまで随所に工夫を凝らしました。興行主やアーティストにも好評で、「またここでやりたい」という感想もいただいています。

樺島 アリーナの3階にあるプレミアムフロアを中心に、家具や設えを担当させてもらいました。プレミアムフロアはスポーツ観戦だけでなく、海外では大きな商談が決まるような大事な場所でもあります。材料には県木に指定されているクスノキや太良町のヒノキなどを使用し、県出身のアーティストと一緒にデザインするなど部屋ごとにコンセプトを変えています。ここを利用された方々が満足し、ハッピーな気分になっていただけたら嬉しいです。

産地を越えてデザイナーや文化をシェア

樺島 賢吾氏
レグナテック
諸富家具メーカー取締役
近年では海外デザイナー10人と立ち上げたオリジナルブランド「ARIAKE」を中心に現在世界26ヵ国で家具を展開し、世界でも高い評価を得ている。

原田 SAGAサンライズパーク全体のサイン計画を担当しました。いわゆる「こっち行ったらアリーナがあるよ」「トイレはここだよ」など、目的地に導く"声"をデザインするような仕事です。一つの目印として、ドットで表現したロゴもデザインを担当し、サインもドットで統一しているので、「サンライズパークっぽいよね」と思ってもらえたら嬉しいです。

●佐賀オリジナルのシステム

齋藤 佐賀県では知事を含め県庁の方々とクリエイターが共創して作っている気がしますがどのようなプロセスで進めていますか?

原田 一般的には行政側が発注し、デザイナーはデザインを納品するだけですが、佐賀県では課題認識からコンセプト設計、制作から納品に至るまで職員の皆さんをはじめ、関わる全ての方々とチームとなって一緒に作っているという感覚です。私は、多くの行政と関わっていますが、あんまり経験したことがありません。

佐賀のクリエイティブ自給率を上げる

原田 祐馬 氏
UMA/design farm
デザイナー
地域に関わるプロジェクト、グラフィック、空間や企画開発を通じて理念を可視化し、新しい体験を作り出すことを目指している。グッドデザイン賞審査委員。

山口 「佐賀を良くしたい」という熱い思いを持ったクリエイターと県のプロジェクトをつなげるハブの役割を「さがデザイン」が担っています。私は、クリエイターの「モノ・コトの本質を的確に捉える力」や「課題解決力」に注目していて、クリエイターと協働することでミッションとコンセプトを明確にし、佐賀県全体を良くしていきたいと思っています。

●デザインから考える佐賀の未来について

樺島 海外からデザイナーを招いて商品開発をすることもありますが、今は自分たちのところだけで完結しています。今後は、諸富家具だけにとどまらず、伝統工芸やものづくりの場といったさまざまなジャンルに、産地を越えてデザイナーや文化をシェアしていくことも考えたいです。情報やデザイン、人脈などがちゃんと佐賀でまわっていくような、そんな未来にしていきたいですね。

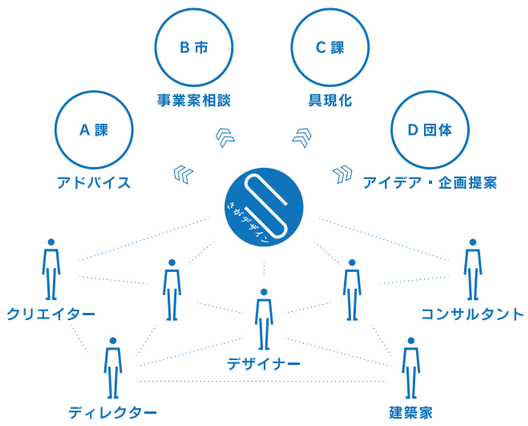
原田 佐賀県の様々な仕事に関わらせてもらう一方で、佐賀にはどんなクリエイターの人たちがいるんだろうと考えます。佐賀の"地"の力というか、地元のクリエイターさんがちゃんとした基盤で仕事ができる環境を、自分たちのスキルを使ってどうにかできないでしょうか。例えば、普段なかなか聞けないようなデザインの専門性の高い話ができる場をつくったり、アワードをつくったりするのもいいですね。地元企業と地元デザイナーをつなげることで、佐賀のクリエイティブ自給率を上げるお手伝いをしていきたいです。

齋藤 今まで繋がっていなかったものを、くっつけてくれるのがデザイン。デザインで資源を見つけることもありますし、デザイン自体が資源ともいえます。「さがデザイン」を取り入れたまちづくりを見てみると、県民の方たちがハード面の部分だけでなく、心も豊かになっていることがよく分かります。ぜひ、他の県なり自治体にも真似してもらって、「さがデザイン」のような取組が日本中に広がってほしいですね。

山口 佐賀の未来を考える上で、構想力、鳥瞰力を持つことは、変化し続ける今の時代にとても大切で、デザインにはまさにこのような力があります。デザインの視点を取り入れることにより、ひとつひとつのプロジェクトがさらに息づき、みんなが様々な面で心地よいと思える佐賀県を創り上げます。

未来から見て、今何が必要なのかを考えていくと、クリエイティブで面白い発想が生まれてくるものです。これからもクリエイターと共に、この地の潜在的な魅力をさらに掘り起こし、佐賀県の新しい輝かせ方を見つけていきます。

さがデザインの仕組み



100名以上の佐賀ゆかりのクリエイターなどの専門家ネットワークから案件ごとに事業立案のアドバイザーや、プロジェクトへの参加を依頼。専門家と県庁内の事業部門の間に「さがデザイン」が立ち、両者をつなぐことで事業の実現をサポートします。

構想力・鳥瞰力を大切にする

山口 祥義氏
佐賀県知事
2015年知事に就任時から、モノとコトをデザインの視点で磨き上げ新たな価値を付与する「さがデザイン」の仕組みを構築し政策に導入している。

主催:佐賀県 さがデザイン